



## 医療法人 青仁会 池田病院

# 腎臓機能障害を抱えるからこそできる 役回りと継続雇用での人材活用



リハビリセンターでは障害者ならではの患者さんとの対応

### 企業プロフィール

医療法人  
青仁会 池田病院

■代表者：理事長 池田 徹  
〒893-0024

鹿児島県鹿屋市下祓川町1830番地

TEL 0994-43-3434

FAX 0994-40-1117

<http://www.ikedahp.com>

#### 業種および主な事業内容

池田病院での健診事業をはじめ、プライマリー・ケアから急性期、回復期から慢性期への医療提供、加えて在宅医療まで対応の総合ヘルス・ケア・サービス業務。外来透析センター、総合リハビリテーション、介護・療養病棟、介護用施設&居宅サービス、介護支援センターほか

#### 従業員数

508名（平成19年2月1日現在）  
うち障害者数8名

<内訳>

|                  |    |
|------------------|----|
| 内部障害者            | 4名 |
| 視覚障害者            | 3名 |
| （うち1名は腎臓機能障害と重複） |    |
| 肢体不自由者           | 2名 |

### 事業所の概要と障害者雇用の経過

昭和38年12月、池田病院を開院、同47年11月、医療法人・青仁会の設立に伴い、青仁会池田病院となる。同60年に透析外来治療棟を新設し、平成2年の病院新築移転に併せ、老人保健施設ナーシングホームひだまりを開設した。以後、鹿屋訪問看護ステーション、介護保険相談センターひだまり、居宅介護支援事業所いけだ、鹿屋市在宅介護支援センターひだまりを順次開所・開設した。現在の池田病院の入院病床数は、一

般・療養・介護病棟に分かれ合計189床。昭和53年以降、慢性腎不全患者に対し人工透析を行いながら、腎移植希望患者に対しては、名古屋第2赤十字病院と連携し移植支援も行ってきた。当時、透析患者のうち腎移植手術を受け社会復帰を果たした数名を、本人たちの希望もあり雇用した。そして慢性腎不全を再発し、再び人工透析を受ける状態になったが、引き続き職員として雇用し現在に至る。

## 改善の注目点 Main Point

障害者であっても特別扱いほしないという環境づくり

→透析治療を通じて、自らの工夫や体験談を生かして患者とのコミュニケーションを図る

内部障害者の内訳：腎臓機能障害者4名

### 内部障害者 雇用の背景

## 本人の精神的、心理的負担を考慮し 障害者を特別扱いほしない環境づくりを目指す

病院で雇用する内部障害者は4名で、全員が慢性腎不全の患者。従って仕事が終わってから週に3回、透析治療を受けている。内部障害者は「体調管理がうまくいってれば」通常の業務に就くことはさほど難しいことではない。

4名のうち2名は外来透析センターで勤務しているため、仕事が終わってから、それまでの職場で治療を受ける。また、1人は、以前、当病院を通じて腎移植手術を受け健常者として働いていたが、腎不全を再発させた。いずれも緊急の場合は、就業しながら治療を受けることが可能で、他の業種に就く人よりは時間的にも物理的にも恵まれた環境にある。病院はもともとバリアフリーで動きやすい。エレベーターなども台数は多く、患者はもちろん、障害がある職員には使用を勧めている。

医療サービスを提供する側としては、特別に雇用環境を改善する努力をしたわけではないが、「笑顔と真心で良質な医療サービスを行う」というモットーの下に、職員であっても特別扱いほしないが内部障害者としての身体的負担増につながらないように配慮している。病気や障害のある人たちの早期回復と、社会復帰を支援することは当然のことであり、これらの処遇はノーマライゼーションの実現を目指す病院の基本姿勢と合致するところでもあった。

ただし、「体調管理がうまくいってれば」といっても、就業中は、いつも体調がいい



患者の立場にたって医療サービスを提供

というわけにはいかない。特別扱いほしないということは、健常なスタッフと同じ扱いになるということ。とはいえ、急な体調の変化などで休みが必要な場合には、優先的に有給休暇扱いにするなど、就業規則の解釈を柔軟に行っている。

池田病院の透析患者の中には、勤務する内部障害者を通して、将来、就業を希望する者もいるが、すべてに込えられる状況には無い。病院という特殊な職場では、雇用される側も専門的な知識や技術、資格が要求される。パソコン技能を身につけているなど、事務系の業務なら受入れの可能性がありそうだ。



池田病院の外観



## 患者会を通じ、患者の要望に応え サービス向上に努める

病院の人工透析センターには、外来透析センターと病棟透析室があり、それぞれ90台、13台の人工透析器を設置し、外来、入院あわせて約240名の患者に対応している。今後、外来に透析器を20台増やす計画がある。

腎臓や肝臓病、パーキンソン病などの難病に関しては、全国にそれぞれにその病気の患者会が組織されていることが多い。鹿児島県の場合は、難病連（鹿児島県難病団体連絡協議会）の下に鹿児島腎臓病患者連絡協議会（鹿腎協）が

あり、「腎友会」という医療施設で組織される患者会がある。池田病院の場合も「池田病院腎友会」があり、約6割程度の患者が加入している。

外来透析センターの山下さんは腎臓病患者として患者会の活動にも積極的で、腎友会の役員を交代で引き受けて、病気を抱えて日常生活を送る工夫や体験談を会で紹介したり、病院や病院のスタッフに対する不満や疑問などの相談に乗ったりしている。また、そのことを病院に申し入れるなど、障害を抱える者だからこその、患者と病院との橋渡し役を勤め、病院側の業務改善や、外来透析センター内の



90台の人工透析器を設置した外来透析センター

施設の整備など患者に対するサービスの向上に役立っている。また、鹿児島県の腎友会が主催する運動会などのイベントに、池田病院の患者会から参加する者があれば、職員が手伝いに出ることもある。

リハビリセンターでマッサージ師として勤務する川崎さんは、糖尿病から複数の障害を抱えていて、外部からの講演依頼も多い。本人が了解すれば休みを取って行くことは許されている。遠隔地に行く場合は、単独で行動することは無理なので、病院のスタッフを一人出張扱いで付き添いとして同行させている。



患者さんとの会話が弾むマッサージ



リハビリセンターでは早期回復と社会復帰を支援

## ANGLE

改善のポイントと  
効果周囲の人たちで見守ってはいるが  
職員でも特別扱いはしない

どんな場面でも職員が障害者だからといって特別扱いはしないことを徹底している。病院という場所柄、どんな患者にも特別扱いせず接するのは当たり前のことだが、病院にとっては患者がお客様、透析治療の現場では、職員がお客様になるわけだから、職員として勤務している時と、患者として治療を受ける時とを、きちんと区別することが大切だ。これは彼ら以外の病院スタッフにも徹底していて、職場を離れたら、他の患者と同じに接するようになっている。優遇するようなことが起こりそうになると、彼らのほうから、同じように扱ってほしいと言っている。

るので、気持ちの切り替えはきちんとできている。

また、彼らが人工透析を受けるために抜ける時間帯の勤務は、他のスタッフがカバーしている。もともと病院業務は時間的に制約のきつい仕事、専門職なので各部署の責任者が指示を出し、現場で決めたローテーションで業務遂行している。

この病気の場合は、緊急の場合も想定されるが、病院勤務だからこそ他業種の人たちよりは恵まれた環境にある。「特別扱いはしない」ということは、普通に接するということ、ただし、彼らの健康については、周りの人たちが普段の勤務の中で見守っている。

## ANGLE

改善のポイントと  
効果風呂場、トイレ、休憩室など  
透析センターの施設を改善

職場環境として改善した点を挙げれば、仕事の後に治療を受けるために、透析センター内の施設を改善した。サウナつきの浴室を整備し車椅子でも使えるトイレを増設した。食事をしたり透析前後に体を休めることができる休憩室も床を高くし、車椅子からの乗り降りを容易にした。将来的にはもっと広くする予定だ。また、駐車場を施設に近いところに確保した。

しかしこれらの施設は、職員だけではなく一般外来の患者も使用するため、障害者雇用のために行った特別な施設・設備改修ではないと考えている。施設の改修には「腎友会」の意見も大幅に取り入れたため、病院スタッフと患者のコミュニケーションが

うまくいき、信頼関係が生まれるという効果もある。



疲れたときは横になれるよう畳敷きの休憩室



サウナ室



浴室



車いす対応のトイレ



職員用駐車場



## バリアフリー化を徹底し 働きやすい環境づくりに気を配る

病院だから当たり前だが、手すりは全廊下についているし、移動しやすい環境は整っている。エレベータの台数も、ほかの企業よりは多いし、大きく乗りやすい。ただし一般の職員には、なるべく使わないことを励行している。

だから雇用した障害者に特別なフォローをしてい

るというほどではないが、働きやすい職場環境づくりには常に気を配っている。職員としてでも患者としてでも、特別扱いでものを考えると、病院としてはかえってやりにくい面もあるので、気持ちの上でもバリアをなくし、また職員が透析を受ける場合であっても患者と同じく「特別扱いしない」ことも、心のバリアフリーだ。

管理担当者に聞く

### Close Up



事務局長 濱田 守正さん

障害者雇用への取り組みとしては、ここは病院です。内部障害者にとって、治療設備がありますから、そもそも働ける環境がそろっているということです。理事長、会長、院長ら病院としても、適材適所で積極的に雇用するという方針です。

青仁会が大きく発展した時、病院も規模が拡大していきました。当然スタッフの数も増やしていかなければなりません。外来の患者さんが増え、さらに高齢者の患者さんが増えると、送迎用のバスも車椅子対応を考えなければならないし、そうすると控え室やロッカーも車椅子の患者さんの使いやすいように変えなければなりません。患者さんのために行った改修が、職員である内部障害者にも好結果が得られたのです。

内部障害者雇用の始まりは、透析の患者さんの中から募って2人を採用し、透析技師の資格を取っていただきました。

現在、透析を受けている患者さんの中には、就職を希望する患者さんもいらっしゃるようですが、現実の問題として、看護や技師など資格が必要な仕事で雇用するのは難しいでしょう。

医療事務課に透析をしている者が一人います。以前家庭の事情でいったんやめたのですが、再度声をかけて復帰してもらいました。新しく採用できるとしたら、パソコンなどを扱う事務系でしょうか、雇用の可能性はあると思います。

透析の場合は、時間的にも制限がありますが、病院の場合はその点余裕があります。病院内での気配りは怠りませんが、何度も言うように、特別はありません。職員が透析を受けるのであっても、他の患者さんと区別はありません。彼らのほうでも同じようにしてくれたほうが働きやすいと言っています。



透析患者さん用送迎バス



休憩室で体調管理に努める川崎さん

## 従業員の声

外来透析センター副部長  
山下 義孝さん



臨床工学技師として、透析、ICU、人工肺などを扱う現場でトータル的に患者と接しています。透析センターでは、特に入院している重症の患者を担当しています。私自身中学生で発症して、高校時代から透析を始めました。熊本で4年間勤務していましたが、故郷でもある鹿屋に帰ってきて昭和58年からここで勤務しています。私自身の透析は勤務時間が終わってから、夜間に行っています。

昨年まで患者会（腎友会）の会計係をやっていました。最近では透析患者も高齢化と若年化が進んでいて、食事や水分制限のリスクを自覚していない人が多い。本人や家族に説明したり、そんな患者と病院との間を取り持つ、架け橋みたいな役割をしていますが、私自身が同じ病気をもっているの、両方によくわかってもらえます。

腎友会としては、国や県、市町村に対して患者の医療費負担などの問題について請願を行ったりもします。もちろん患者同士の交歓会や病院の施設改善など、身近なことについても話し合っています。ロッカールームの改修など、われわれも動きやすくなりました。

運動療法士  
川崎 悟さん



私は15歳で相撲の世界に入って、幕内の前頭上位までいったんですが、糖尿病になって合併症で目が見えなくなり、人工透析をはじめました。相撲界は華やかな世界です。やめた当時はもう人生をあきらめていましたが、このままではいけないと思い、故郷の鹿児島県の県立盲学校に入学して資格を取りました。

今の私は目が見えない。片足を膝下切断しもう片方は人工骨とうで、歩行器を使っています。周りのリハビリセンターの人たちがいろいろと手を貸してくれます。自分の治療の時も、やはり透析のところまで送ってくれる。ここは上に立つ人、ドクターもみんな理解があります。仕事の上ではハンデを背負っていると感じさせない対応をしてくれますから、やりがいがあります。

マッサージの仕事は3名で受け持っていて、1日の外来は50～60人の患者数があります。私には障害者団体や学校、一般の企業から講演の依頼があります。対象は子どもたちや高齢者ですが、1時間30分くらい、障害をもってがんばって生きているという話をしています。遠くから呼ばれることもありますが、病院はそれにも理解を示してくれています。

## REPORT ● 私たちの業務 ●



山下さんは入院している重症患者を診るほか、患者会（腎友会）の役員も担当して、患者と病院の間との架け橋的な役割も果たしている。



リハビリセンターで患者の治療を行う。マッサージ台は足が不自由な川崎さん用の特注品。